

「世界中東学会に参加して(全体の感想)」

領域代表：酒井啓子

2018年7月、第5回世界中東学会がスペインのセビーリャで開催された。スペインは、8年前のバルセロナ大会以来2度目の開催である。4年毎に開催される世界中東学会は中東と非中東（主としてヨーロッパ）で交互に行われるが、ヨーロッパでもスペインは、地中海を挟んでイスラーム圏とキリスト教圏が衝突し共存した歴史を背景に、「中東」研究者の集う場所として最適と考えられているのだろう。8年前のバルセロナの時にはEUが環地中海対話をバックアップしていたし、今年のセビーリャ大会ではスペインとモロッコの間で設立された「3つの文化基金」が後援団体となっていた。

世界中東学会が発足し第一回大会がドイツ（マインツ）で開催されたのは、2002年、9.11事件の翌年である。世界中東学会が設置した「世界中東学会賞」の栄えある第一回受賞者にはエドワード・サイドが選ばれたが、癌にむしばまれていたサイドは、そのちょうど1年後に息を引き取った。9.11事件後、反イスラーム色を強める米欧の政権担当者と、それに寄り添うオリエンタリスト中東研究者が、気炎を吐いていた時のことだ。そのオリエンタリスト達に20年以上前に厳しい批判を浴びせたサイドを、荣誉ある学会賞第一号に選んだことが、世界中東学会のポリシーをよく示している。ヨーロッパと中東を交互に、というのも（アメリカで行うのではなく）、中東出身の研究者が旅費の負担少なく参加できるように、という配慮が現れているといえよう。

その意味で、今年の世界中東学会賞受賞者がサイドと同じくコロンビア大学のパレスチナ系歴史学者、ラシード・ハーリディだったことは、サイド以来の伝統が貫かれている証左だろう。自身の数多ある著作ももちろんだが、ジャーナル・オブ・パレスティナの編集などパレスチナ研究に多大な貢献をした。

ハーリディの受賞記念講演で印象的だったのが、研究が象牙の塔に閉じこもることへの批判を強調していた点である。博士論文を書くために重箱の隅をつつくばかりのようなことをして、いいのか。博士号を持った者こそ、象牙の塔から出て、外交やビジネスやNGOや国際機関など、実務に知識を活かしたほうが、よほど重要なのではないか。さらに印象的だったのは、かつてオリエンタリストと評されてきたサー・ハミルトン・ギブなどの一世紀前の中東史家を再評価していたことである。博士論文を書く技術ばかりに血道をあげて専門性ばかり高めるよりも、かつての中東史家たちのように、哲学から歴史、語学すべてを包括的に捉える学者が現れないものか、というのが、ハーリディの嘆きだった。愚痴とも聞こえる彼の警告は、15年前に地域研究の危機が叫ばれ、その学問的意義を問う論集に論文を寄稿した彼の、地域研究がどんどん専門化し理論の下僕化していくことに対する危機意識の表れだったのかもしれない。

5日間にわたる学会では1700人以上の研究者らが参加、400以上ものパネルが組まれた。

博論執筆中、あるいはちょうど博論を終えたばかりの若手研究者の報告が多かったのは、いつものパターンであるが、とくに特徴的だったのは地元スペインはもちろん、イタリアなどの近隣ヨーロッパ諸国、エジプトやチュニジアなど地中海対岸のアラブ諸国からの参加が多かったことであろう。そのせいもあって、前回大会に続き、「アラブの春」を巡るパネルが多く企画されることにつながった。

全てのパネルを概観することは不可能だが、いくつか興味深いパネル、報告について記しておきたい。ひとつは、イラク研究に関する諸パネルでの議論である。例年、イラク研究の大御所、ターリク・イスマイルが中心にイラク研究のパネルが組まれるのだが、戦後のイラクの現状について「国家としてのイラクは終わった」と断言するイスマイルに対して、フロアから若手の在外イラク人研究者がイラク・ネイションの健在を強調して反論する姿が印象的だった。このパネルでは、同じく古くからのイラク研究者、ジョゼフ・サスーンがイラク戦争で米軍が接収した旧体制の資料を用いて研究報告を行ったのだが、実はその数日前のパネルで、これまた 80 年代以来イラク内政を細かく追いつけてきたイスラエルのイラク研究者アマツェア・バラムが、サスーンの方法に手厳しく批判していたのである。その批判の内容は、「サスーンにせよ他の若手研究者にしても、米軍が接収した歴史文書をありがたがってこれに完全依存しているが、自身で集めた資料をどう読み込むかといった努力が見られない」というもの。一言でいえば、情報が少なく現状分析に「職人技」が必要とされていた 2003 年以前のイラク研究が、がらっと様相が変わってしまった 2003 年以降のイラクをどう読んでいいのか全くわからず、手に負えず、老舗研究者が困惑している、ということだろう。そして、老舗研究者の現状の読めなさに、若手研究者がイラク。イラク国内社会の世代間ギャップを反映したかのような議論に、印象づけられた。

もうひとつ、印象的だったのが、カタールのハマド・ビン・ハリーファ大学の若手研究者たちが企画した、カタールでの移民社会における宗教実践の実態についてのパネルである。インドネシアやメキシコ出身で同大学に籍を置く留学生や若手研究者が、カタールのインドネシア人コミュニティやインド・ケララ州出身の移民労働者の間で、出身国でのイスラーム儀礼がカタールでいかに継承されているか、カタール社会のなかでいかに他の国出身のムスリムコミュニティの儀礼とどう共存しているかをフィールド調査した。メキシコ人の学生は、これまでほとんど注目を浴びることのなかったカタールのシーア派コミュニティに入り込んで実態調査を行った。なぜこれらの報告が印象的だったかという点、カタールの大学でそのようなエスノグラフィックなフィールド調査ができるとは思ってはいなかったからだ。カタールの大学に籍を置くというのは、他の湾岸諸国の大学同様、とりあえず数年間良い給料を得られるいい職場だから、とくらいにしか思われてこなかった、というのが、正直なところだろう。それが、意外にしっかりした調査を行っていること、特にアジアからの移民社会との関係というある種タブー的なテーマに取り組めていることに、感銘を受けたのである。

一方で、他のパネルに参加した友人からは、カタールと UAE の研究者の間で議論が炎上

した、と聞いた。2017年6月にカタールがサウディアラビアを中心にしたアラブ湾岸諸国から絶縁され、孤立している現状が、研究者社会にも影響を与えているのは間違いない。ペルシア湾岸の覇権抗争が中東研究の動向にどのような影響を与えるのか、研究者としては無視できないところである。